展示記録

阿部次郎記念館新規資料及び法文学部開設関係資料公開展示「阿部次郎と法文学部」

加藤　諭・曽根原　理・岡安　儀之・小嶋　翔
仁平　政人・杉本　欣久・伴野　文亮

会期　2022年（令和４）９月29日（木）～ 2022年12月23日（金）
会場　東北大学史料館２階展示室
主催　東北大学大学院文学研究科、東北大学史料館
協力　吉野作造記念館、東北大学附属図書館

阿部次郎記念館新規資料 公開展示 ご挨拶

大正時代から高度経済成長期頃まで青年たちの必読書とされる随筆がありました。それは1914年に刊行された『三太郎の日記』。深い自己省察に基づき、近代的自我の独白として共感を呼び、一時代を築くベストセラーでした。現在でも東北大学川内キャンパスには、この随筆にちなみ、思索するのに最適な散策コースとして「三太郎の小径」が設けられています。この『三太郎の日記』の著者である、阿部次郎の足跡を、新規資料とともに紹介し、東北大学に根ざしてきた文系の知にふれる企画展示をこの度、開催いたします。

東北帝国大学に文系の学部が設置されたのは、1922年８月のこと、勅令第三九六号によって法文学部が誕生します。翌年1923年に美学講座が設けられると、その初代教授に招へいされたのが阿部次郎でした。阿部次郎は山形県の出身で、第一高等学校、東京帝国大学文科大学を卒業後、夏目漱石の門下に入ると、本格的に文筆活動を開始、『東京朝日新聞』の「朝日文芸欄」で頭角をあらわすと、『三太郎の日記』、『人格主義』などの著作を相次いで刊行、大正教養主義・人格主義を象徴する人物として名声が高まっていた中での任官でした。

阿部次郎は、東北帝国大学に着任する前に、１年半ほどヨーロッパを外遊しています。ここで阿部は日本文化を世界的な視点から捉えようとする、その後の研究の基礎を形成することになります。東北帝国大学法文学部教授として仙台に赴任後は、美学を講義し、ダンテ、ゲーテ、ニーチェなどを紹介する一方で、『徳川時代の芸術と社会』を刊行するなど、東西芸術を比較しながらその価値を見いだしていきます。また、同時代の作家、歌人、俳人、画家、演劇人らと幅広く交流があったことから、文科系の初代教授陣の人選を中心的に担い、夏目漱石門下の終生の友人で独文学者の小宮豊隆、西洋芸術史の児島喜久雄や英文学者の土居光知らを招き、今日の東北大学の文系における学知の基礎を築くことになりました。1941年から1942年までは、第７代法文学部長を務め、戦時下の困難な中での学部運営も担っていくことになります。

1945年に東北帝国大学を退官後は、国語学者の山田孝雄や国文学者の角川源義らの協力を得て、1954年に財団法人阿部日本文化研究所を設立し、1959年に死去するまで晩年も思索や研究

を続けました。阿部次郎死去後、同研究所は東北大学文学部に寄附され、敷地建物は現在「阿部次郎記念館」として一般公開されています。阿部次郎記念館にはこれまで未公開の資料が保管されていましたが、2020 年に資料群が東北大学史料館に寄託され、文学研究科の協力も得ながら、整理公開が進められています。今回の企画展示はその成果も盛り込まれています。どうぞご観覧ください。

東北大学大学院文学研究科、東北大学史料館

1-1　生家と家族 Family and Birthplace

生い立ち　Early Days

阿部次郎は1883年（明治16）、山形県上郷村（現・酒田市）に父・富太郎と母・ゆきの次男として生まれた。阿部家は地域で庄屋格であり、８人兄弟のうち次郎を含め４人が学問の道に進んでいる。鶴岡の荘内尋常中学校に入学して実家を出た阿部は、級友と自炊寮で生活する中で次第に哲学への志望を固めていく。

中学校放校から上京へ　Expelled from School

1898年（明治31）に父・富太郎の転任で山形中学校へ転校した。しかし５年次の1900年（明治33）、学生の自由を過剰に戒める校長に対して排斥事件を起こし、放校処分を受ける。高等学校進学には中学を卒業せねばならず、行き場を求めて阿部は上京。結局、翌1901年（明治34）に私立京北中学校に入学、約半年の在籍の後に無事卒業し、卒業式では学生総代として証書を受けとった。

1-1-1　阿部次郎書簡（阿部富太郎あて）

1897年（明治30）９月中旬　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。荘内中学校在学中の阿部が、仕送りをしてくれる父・富太郎に宛てて寄宿舎に入ることを決めた旨を報告したもの。自炊をすれば寮費を安く抑えられるが、ろくな食事を作れず健康を害するのではないかなどと悩んだことが率直に書かれている。

1-1-2 『一葉全集』（博文館）

1897年（明治30）１月　東北大学附属図書館所蔵／阿部文庫

中学時代の阿部は樋口一葉を愛読した。特に好んだ作品は「うつせみ」で、1897年（明治30）刊行の『一葉全集』もすぐに購入している。展示は東北大学図書館・阿部文庫のものであることから、そのときの購入本だと思われる。

1-2　一高から東大へ　Getting into The First Higher School and Then to The Imperial University of Tokyo

第一高等学校での出会い　Meeting friends in The First Higher School

阿部は1901年（明治34）に第一高等学校に入学する。寮生活を共にした岩波茂雄は生涯の友人となった。『校友会雑誌』の編集を通じて斎藤茂吉、安倍能成、魚住影雄らとも出会う。1903年（明治36）には後輩の藤村操が華厳滝に投身自殺し、青年層の「煩悶」の問題が注目された。

第一高等学校での出会いは、人間のあり様を問う倫理学の道へと阿部をいざなっていく。

哲学の道への助走　The path to a career in Philosophy

第一高等学校は「勤倹尚武」と呼ばれるバンカラな校風が伝統とされたが、阿部は『校友会雑誌』に「校風と自治と」（126号、1903年４月30日）を寄稿し、特定の道徳規範で学生の内面的自由を束縛することを批判した。後の教養主義者の姿はこの頃から垣間見える。1904年（明治37）には東京帝国大学文科大学哲学科に進学し、ケーベルや大塚保治の指導を受け1907年（明治40）に卒業。卒業論文は「スピノザの本体論」である。

2-1　夏目漱石との出会い　Meeting Natsume Soseki

高等遊民になる　Chose to be a “Kotoyumin（graduates who choose to be unemployed）”

阿部が大学を卒業したのは1907年（明治40）。しかし、この頃の大学卒業生は就職難であった。日露戦争（1904 ～ 05）も終わり、日本は一応の近代国家としての体裁を整えた。西洋学問を修めれば栄達が保障された時代は過ぎていた。俗世間に入ることを好まなかった阿部は、高等教育を受けながら就職をしない「高等遊民」として日々を送る。

漱石門下に　Becoming a disciple of Soseki

阿部と夏目漱石は第一高等学校や東京帝国大学で学生と教員の関係にあり、その頃から一定の面識はあった。しかし、阿部が漱石を直に訪ね、その門下となるのは、東京帝大卒業から２年後の1909年（明治42）である。職も無く高等遊民の状態にあった阿部は、この年漱石が『東京朝日新聞』に設けた「朝日文芸欄」で筆を執るようになる。

2-2　夏目漱石と阿部次郎　Natsume Soseki and Abe Jiro

自然主義文学との論争　The controversy surrounding naturalism

阿部は1909年（明治42）12月に「驚嘆と思慕」で「朝日文芸欄」にデビューする。その内容は、自然主義派の雑誌『早稲田文学』に対し、永井荷風の小説を称賛するのは彼らの「自然主義」という観念が曖昧だからだと批判するものであった。時代の文芸思潮は自然主義全盛であったが、以後阿部はこれに対抗する漱石門下の一翼を担っていく。

漱石と阿部次郎　Soseki and Abe Jiro

漱石の下で文筆家としての歩みを始めた阿部だが、二人の思想は同じであったわけではない。あくまで創作を通じて人間を描いた漱石に対し、阿部は直接的に人間の内面や人格の問題に向き合う道を選ぶ。「門下生の書いたものゝうちに、先生が心から同感されたものはどれほどあつたか」「門下生に賑かに取巻かれてゐながら、思想上並びに芸術上、随分寂寞を感じてゐられた」と阿部は漱石の孤独を察していた（「夏目先生のこと」）。

2-2-1　阿部次郎書簡（漱石あて）

1914年（大正３）11月19日　阿部次郎記念館所蔵

夏目漱石に宛てた『こゝろ』（1914）の感想。天皇の死をきっかけに主人公が「明治の精神」に殉じて自殺する結末に戸惑ったのか、物語展開の唐突さについて「先生の芸術の浪費」だと不満を示している。なお本書簡は投函されず、表現を穏便に直した別の書簡が翌日に送られた。全集所収。

2-2-2　阿部次郎書簡（漱石あて）

年次不明２月３日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。「朝日文芸欄」の原稿につき、森田草平、小宮豊隆、安倍能成が無断で文章を改変したことに強く抗議した阿部が、漱石に宛てて存念を書き送ったもの。「思想の独立」は尊重されるべきだとした上で、改変された結果、自分の意図とは異なる内容になったと不満を述べている。

2-2-3　森田草平書簡（阿部次郎あて）

1910年（明治43）１月４日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。「朝日文芸欄」関係者による新年会の連絡。差出人は森田草平と小宮豊隆。会場は「夏目宅」とあり、戯れのつもりか、余興として「落語（夏目漱石）」と記した上で取り消している。漱石門下の雰囲気を伝える葉書。

3-1　『三太郎の日記』の刊行　Publishing “Santaro’s Diary”

文筆家としての活動　Abe Jiro as a writer

「朝日文芸欄」でデビューした阿部は、美学の研究を進める傍らで、文筆活動を積極的に行っている。1911年（明治44）には、漱石門下の仲間である小宮豊隆・安部能成・森田草平との合著『影と声』（春陽堂）を刊行。同年、斎藤茂吉の勧めで歌誌『アララギ』に「痴人の歌」を発表。その翌年には『読売新聞』の客員として随筆「三太郎の日記」ほかを寄稿するなど、文筆家としての存在感を高める。このような活動が、著書『三太郎の日記』の刊行につながっていく。

『三太郎の日記』の刊行　Publishing “Santaro’s Daiary”

1914（大正３）年３月、阿部は出版社・東雲堂からの申し入れにより、単行本『三太郎の日記』を刊行する。同書は「愚か者」の意味を持つ「三太郎」という名の人物（青田三太郎）を筆者に擬し、随筆・評論・小説・詩など様々なジャンルの文章を収めている。だが阿部にとって、それらの文章は「人生と自己とに対して素樸な信頼を失った疑惑の時代から、少しく此信頼を恢復し得るようになった今に至るまでの」、「自分の内面生活の最も直接な記録」（『三太郎の日記』自序）という意味を持つものであった。

同書は好評を博し、翌年には、友人・岩波茂雄が興した岩波書店から続編にあたる『三太郎の日記・第弐』を刊行。1918年（大正７）には２冊の内容と『第弐』以降に執筆された文章をおさめた『合本 三太郎の日記』（岩波書店）を刊行する。

3-1-1　阿部次郎ほか著『影と声』（春陽堂）

1911年（明治44）３月　阿部次郎記念館所蔵

小宮豊隆・安部能成・森田草平との合著として刊行された、阿部の最初の著作。阿部は「彷徨」という総題のもと、1906 ～ 1910年にかけて執筆した18編の評論・随筆と、ニーチェの詩「夜の歌」の翻訳を収めている。

3-1-2　森田草平書簡（阿部次郎あて）

1911年（明治44）３月２日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。阿部らとともに刊行した『影と声』を「実によい本だ」と自賛し、その中でも阿部の評論「実験と経験」を「最も面白く読んだ」、「僕の今から書く小説を予め説明してあると思う」と伝えている。

3-2 『三太郎の日記』の名声　Abe Jiro’s Santaro’s Diary Fame

高まる名声　Becoming a bestseller

阿部は「千人以上の人に向ってぼくの書いたものを読んで下さいと云い得る程立派なものとはとても思われません」（東雲堂・西村陽吉宛書簡、未投函）というように、『三太郎の日記』が多数の読者を得る書籍になるとは考えていなかった。だが、『三太郎の日記』は刊行の直後から多くの賞賛が寄せられ、ベストセラーとして広く読まれていく。刊行の２ヶ月後に「少し評判がよすぎる」、「僕は今僕に許されたfameの絶頂に立っているのではないかしらと思う事がある」（「形影の問答」、『三太郎の日記・第弐』に収録）と阿部自身が記しているように、同書の成功によって阿部は文筆家としての名声を得るのである。

青年たちの愛読書　Young boys’ favourite book

特に『三太郎の日記』の熱心な読者となったのは、旧制高等学校の生徒や大学生などの青年たちであった。例えば哲学者・谷川徹三は、第一高等学校の在学中に『三太郎の日記』を読んで感銘を受け、阿部の家を訪ねて教えを乞い、後年に至っても最も影響を受けた人物として阿部を挙げている。谷川が「旧制高等学校の学生の一度は読むべき本」（「百年の名著 三太郎の日記」、『朝日新聞』1969年6月23日）というように、『三太郎の日記』は第二次世界大戦後に至るまで、教養を求める青年たちの愛読書であり続けた。

3-2-1　阿部次郎著『三太郎の日記』（東雲堂書店）

1914年（大正３）３月　東北大学史料館所蔵

「自己の内面生活の最も直接な記録」として、1908 ～ 1914年にかけて執筆された随筆・評論・小説・詩などを収めた著作。刊行直後から広く読まれ、阿部に文筆家としての名声をもたらすことになる。

3-2-2　江馬修書簡（阿部次郎あて）

1912年（大正元）10月10日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。江馬修は阿部次郎と親しく交際した作家。この葉書では、阿部に関する文章を文芸雑誌『スバル』に掲載することを報告するとともに、『読売新聞』掲載の阿部の随筆（のちに『三太郎の日記』に収録）を「面白く拝見しています」と伝えている。

3-2-3　江馬修書簡（阿部次郎あて）

1914年（大正３）５月８日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。スウェーデンの作家、ストリンドベリ（「ストリンドベルヒ」）の小説『赤い部屋』を翻訳・刊行する企画について、阿部に相談する内容。２年後の1916年、『赤い部屋』は阿部・

江馬の共訳で新潮社から刊行されている。

3-2-4　ストリンドベルヒ作、阿部次郎・江馬修訳『赤い部屋』（新潮社）

1916年（大正５）１月　阿部次郎記念館所蔵

阿部次郎・江馬修の共訳で刊行された翻訳書。江馬修著『一作家の歩み』（理論社、1957年）によれば、「まず私が英訳本から訳し、それを下訳として、阿部がシェリングのドイツ訳により綿密に修正したもの」という。

4-1　阿部次郎の「人格主義」 Abe Jiro’s “Personalism”

『人格主義』の刊行　Publishing “Personalism”

1921年（大正10）、39歳の阿部は、満州・朝鮮での講演をもとに、『人格主義の思潮』をまとめあげた。同書に論文数編を加えた『人格主義』が、翌年に岩波書店から刊行されている。明治の立身出世主義に対する違和感を表したのが『三太郎の日記』であるとすれば、その目指すところを理論的に構築し、教養の立場から大正期の時代性を明確に示したのが『人格主義』であった。「人格の成長と発展とに至上の価値を置」き、「物質主義と正反対の立場」に立った結果、社会主義思想や、後には軍国主義からの攻撃を受けた。一方で、単なる理念や信仰にとどまらず、より積極的に不断の努力を説いた点が近年注目されている。

竹内仁の批判　Criticism of Abe’s personalism by Takenouchi Masashi

最初に批判者として現れたのが、東京帝国大学の後輩でもある竹内仁（1898-1922）であった。彼は第二高等学校在籍中に阿部に傾倒したが、その後に社会主義思想の立場から阿部の意見（所得の増加は労働者を本質的に幸福にするものではない等）に対し、実践的には無価値でありブルジョア的であると批判した。阿部の思想を十分受け止めた上での批評として、注目されることも少なくない。

4-1-1　阿部次郎著『人格主義』（岩波書店）

1922年（大正11）６月　東北大学附属図書館所蔵／小宮文庫

前年刊行の講演筆記『人格主義の思潮』(非売品)や諸論考を収録する。リップス著『倫理学概論』（1899年）に依拠し、人格の成長と発展を人生の目的と説く。展示資料は、盟友の小宮豊隆の旧蔵。

4-1-2　吉野作造原稿

1922年（大正11）９月　吉野作造記念館所蔵

雑誌『文化生活』に掲載された「理想主義の立場の鼓吹―阿部次郎君の「人格主義」を読んで」の原稿で、理想主義の思想が劣勢になる時代状況の中、阿部の著作は大きな価値があると絶賛している。

4-1-3　竹内仁書簡（阿部次郎あて）

1922年（大正11）２月９日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。前触れなく、公刊された雑誌上で突然に阿部を批判した自らの行動について、事前に個人的な意見交換など穏当な手段をとらなかった事情を弁明する内容。阿部の外遊中に竹内

が女性問題で自殺したため、両者の議論が深まることはなかった。

4-2　東北帝国大学への赴任　New Academic Post at Tohoku Imperial University

新たな文系学部への志向　Jiro' s expectations to newly established Faculty of Arts

『人格主義』刊行の際に付加された「余論」の一部に、1920年（大正９）２月の講演記録があった（竹内仁も聴衆の一人）。東京帝国大学の経済学部助教授だった森戸辰男が、無政府主義思想を紹介したため退職・下獄に至った事件に対し、森戸擁護を主張した内容である。阿部は講演で国家と大学の関係を論じ、森戸を、ひいては大学の独立を守れない東京帝国大学のあり方を批判する。また書簡で黎明会の同志に森戸擁護を訴えるだけでなく、実際に裁判関係者と議論もしている。こうした活動と並行して、阿部の中に「新しい精神の文科大学」や「プロフェッサーとしての仕事」を志向する想いが醸成されていた。

仙台への赴任　Moving to Sendai

ちょうどその時期に、東北帝国大学に法文学部が新設されることになった。1920年に創立委員長となった佐藤丑次郎は、京都帝国大学の法学部教授（政治学）であったため、文学系の新たなスタッフの中心人物として、阿部次郎に注目した。田辺元の仲介による佐藤の要請を受け、仙台への赴任を決めた40歳の阿部は、同僚になる教授たちをスカウトし、教授就任に先立ち外遊に旅立つことになる。

4-2-1　佐藤丑次郎書簡（阿部次郎あて）

1921年（大正10）４月１日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。阿部の東北帝国大学赴任に関し、日記の1921年４月２日条に「佐藤丑次郎氏より会見申込の手紙来る」との記事があることは知られていたが、今回発見された封書は「上京仕候に付、一度拝眉之機会を得て御高見拝承致したく」と、まさにその手紙であると思われる。

5-1　ヨーロッパ外遊と日本文化への目覚め　A Trip to Europe and a Cultural Awakening

ヨーロッパ外遊とその目的　The purpose of the trip

1922年（大正11）５月７日から翌年10月までの１年半、阿部は文部省の在外研究員としてヨーロッパ外遊を果たした。「その土地でなければ見られぬものを見、其処に住まなければ接し得ぬ生活に接することを主眼」とし、「美術館を出来るだけ丁寧に歴訪すること」と「実際生活を味解すること」が目的であったという（『游欧雑記』）。実際にドイツ、イタリア、エジプト、ベルギー、フランス、イギリスなど各国を訪れ、ルーブル美術館や大英博物館など現地を代表する施設を巡った。行動を共にしたのは東北帝国大学教授（美学・美術史の初代）・福井利吉郎、同助教授・児島喜久男、美術コレクターとして知られる原三渓の長男・善一郎、画家の小林古径や前田青邨らであった。福井は大英博物館の名品として知られる顧愷之筆「女史箴図巻」の模写（附属図書館蔵）を小林古径と前田青邨に依頼しているが、その制作に際しては阿部の存在も無関係でなかったとみられる。この外遊は1923年（大正12）９月２日にもたらされた関東大震災の報で終わりを告げ、予定を切り上げて11日に欧州を出航、10月20日に東京へ帰着することとなる。

ルーブル美術館で受けたショック　The Louvre and Abe's culture shock

1923年（大正12）、連日にわたってルーブル美術館を訪れた阿部の感想が『仏英日記』に書き

留められている。特に７月28日条は東西の芸術を比較して受けたショックを率直に綴っており、その文芸観を知るうえでも重要な記述となっている。「日本の浮世絵を見てからコロー、モネ、ドガなどを見ると、やはり後者の方が芸術の正道を踏んだものだという気がする。…（浮世絵は）人生の片隅におしこめられた者の鬱憤晴らし、軽口、迎合、色好み等の下品さに似たものを持っている。…これでは本当の芸術が出来っこないと思う。…芸術を人生の最高最深のInteresse（興味）と結合し得る位置に置け。さうして其処で日本人のBon Sens（良い感覚）を育てよ。…さうするのが将来の日本芸術を育てる道である。僕はこのコレクションを見て自分の国が恥かしかった。」帰国後、この経験を踏まえて江戸時代における芸術性の優れた点について論述したのが、『徳川時代の芸術と社会』であった。

5-1-1 『游欧雑記　獨逸の巻』（改造社）

1933年（昭和８）２月

外遊中の日記に基づき、およそ10年後に文芸誌『改造』に綴られたドイツ旅行記である。「獨逸の哲学と文学との理解」を得るため、ベルリンやミュンヘンをはじめとする多くの街を訪れた阿部にとり、最も心に刻まれたのが学問の街として著名な古都ハイデルベルクであった。当初の「願いが満たされた」と記すように、紙面の多くがその滞在時期に割かれている。

5-2 『徳川時代の芸術と社会』の刊行
Publication of “Art and Society during the Tokugawa Period”

刊行の経緯と執筆目的　The story behind its publication

1931年（昭和６）６月に刊行された『徳川時代の芸術と社会』は、1925年（大正14）９月号から文芸誌『改造』に連載された「遊欧雑記―芸術の社会的地位に就いて」を収録したもので、各編によって執筆時期が異なっている。

「前編」1925年８月～翌年９月　「追補」1927年４月

「後編」文学論　1927～1929年・浮世絵論　1931年

本書執筆の目的については、「先の外遊から帰国の途につく際、私の心は日本を如何にすべきかといふ大きい問題を背負って来た」ことを承け、「その解答に対する準備作業の成績を茲に報告する」ことと阿部自らが記している。同じ「自序」には「歴史家としての責任」の語が認められ、歴史学者の立場から論じた内容であったことも判明する。

阿部が論じたかったこと　What Abe tried to discuss in the book

本書最大のテーマは、「江戸時代の平民芸術（浮世絵）や文学は恋愛をどう取り扱ったか、それは恋愛文化の向上にいかに貢献し、恋愛文化の発展にいかに影響したか」である。

外遊によって実感した東西芸術の違いをヒントとし、江戸時代の芸術も評価に値することを論じる。まず、西洋芸術は性欲生活を「倫理化」しているゆえに、それを「美化」した東洋芸術よりも優れているとの考え方を示す。阿部は男女ともに一個人、一人格として信頼と愛着をもって相手に接することにより、はじめて「性生活」に倫理的な基礎が与えられるという。一方、日本では女性を一人格として見ることが遅れているとし、「すべて男女の道は嗣を立つるのみなり」という儒教思想が根付いているのに大きな問題があるとみた。

性における倫理的根拠が「子孫の継続」「後継ぎの誕生」の意義のみに置かれているのは人情

に疎く、江戸時代の性的退廃はここから起こり、それは阿部の生きた時代も同じだと断じる。つまり、性は純粋に人格的に愛し合った結果でなければならないと考えたのである。

それではなぜ、江戸時代の芸術を評価できるものとしてとらえたのか。阿部は浮世絵や文学は完全に性を「美化」しているのでなく、「倫理化」の要素が認められるという。男女における「情趣」は特に「遊郭」の文化において発展し、西鶴や近松の文学、さらに浮世絵にはそれが反映するため、純粋な「恋愛」の要素が存在していると看破したわけである。

5-2-1　阿部次郎著『徳川時代の芸術と社会』（改造社）

1931年（昭和６）６月

改造社による初版本で、終戦後の1948年（昭和23）にはやや判型を小さくして再版された。広島出身の評論家・倉田百三とともに収めた1956年刊の筑摩書房『現代日本文学全集　第74』では前編のみを掲載し、さらに著作を網羅した『阿部次郎全集』（全17巻・角川書店・1960～66）は「第８巻」に収録する。ほかに角川選書による普及版（1971）が刊行されている。

6-1　阿部次郎と左翼運動　Abe Jiro and Leftist Movement

社会主義との論争　Controversy surrounding socialism

資本主義の進行により社会的矛盾や貧困問題が顕在化すると、社会主義が日本でも注目されるようになる。さらに、1917年（大正６）に起きたロシア革命は、日本の知識人により社会主義を浸透させていくこととなった。阿部は、社会主義を「誇張せられた革変」とし、影響下にあった労働運動に対しても批判的な立場をとった。そのため、社会主義者の間から、阿部の人格主義への痛烈な批判が起こった。

長女・和子の検挙　Arrest of Jiro's eldest daughter, Abe Kazuko

1930年（昭和５）４月、東京女子高等師範学校に入学した阿部の長女・和子（1913-1989）は、翌年10月に無産青年同盟女高師連盟に参加していたことを理由に治安維持法違反で検挙された。阿部は、左翼思想に傾倒する長女に対して説諭を試みるも、和子の意志は固くその後も検挙を繰り返した。阿部の人格主義は、実の娘からも批判されることとなる。阿部は和子の検挙をきっかけに、1926年（大正15）以来続けていた大学評議員を、1932年（昭和７）１月辞職している。

6-1-1　阿部和子書簡（阿部次郎あて）

1939年（昭和14）８月13日　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。東京にいる和子が阿部に宛てたもの。１年か２年後仙台に帰って託児所で働くために、東京にいる間は、社会事業研究所で助手として勉強したいと、阿部に相談している。和子は、「特高」からの妨害を心配しつつも、それを防ぐためにもこの仕事をして信用を得たいのだという。

6-1-2　阿部和子書簡（阿部次郎あて）

年月日不明　阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。東京にいる和子が阿部に宛てたと思われるもの。阿部が自分をいつまでも子供扱いし、信用していないと和子は嘆く。一方で、仕送りをいくらしてくれるのか、できるだけ早く送るよう催促もしている。

6-2　軍国主義との対立　Anti-Militarism

文系軽視への批判　Criticism of the growing disrespect to arts and humanities

戦時下においては、武器製造など戦争に貢献できる理系研究が推奨される一方、文系の学問を軽視する意見が強くあった。1944年（昭和19）８月、総長の熊谷岱蔵（1880-1962）は、今後の大学の方向性について、教員に諮問を行っている。その中で阿部は、「あらゆる研究及教育の継続は時局の急迫中に於いても依然として必要なり。教育を軽視する戦争は航空者の養成と補充を怠る航空作戦の如し」と回答するとともに、文系の学問拡充の必要性を訴えている。

出陣する学生へのはなむけ　Sending a farewell message to students going to the war

1943年（昭和18）10月、法文学部文科に入学した原田夏子（1921-2022）の回想によれば、この年の阿部の「美学概論」には多くの立ち見学生も現れるほどの盛況であったという。そこで阿部は、徴兵を待つ学生に向けて、今後「大学とは異質の軍人の世界に文盲との戦いが待っている」と語り、彼らへのはなむけとした。軍人に対して、学問や芸術の本質を理解できない「文盲」と呼んで憚らない阿部の大学人としての覚悟を示すエピソードと言えよう。

6-2-1　学生の卒業期の繰り上げ

1941年（昭和16）10月７日　東北大学史料館所蔵／総務文書

1941年（昭和16）９月、政府は本来の卒業期である翌年３月から、３か月繰り上げて12月とするよう通達。熊谷岱蔵総長は、10月７日に開催した評議会で参加者に意見を求めた。資料は、法文学部長としての阿部の回答。学力の低下、国家試験や教員検定の単位取得の問題など、学生の卒業後の人生に大きな影響を及ぼし、収拾のつかない事態になると警鐘を鳴らしている。

6-2-2　学生勤労動員に関する阿部次郎の見解

1944年（昭和19）　東北大学史料館所蔵／総務文書

戦況が悪化する中、熊谷岱蔵総長が教員にアンケートを行った際の阿部の回答。回答の最後には、「必要とあらば直接に御目にかかることを嫌はず」と記している。総長に対して、大学の同僚として責任をもって議論しようとする阿部の姿勢が垣間見える。

７-1　学生との交流　Relationship with Students

教育者として　As an educator

阿部は学生から慕われた教員であった。法文学部美学講座教授として教鞭を執る日々にあって、阿部は毎週木曜日を「面会日」と定め、自宅で学生たちと親睦を深めていた。阿部の日記の1934年（昭和９）４月26日条をみると、面会のあと残った数名と花見に出かけ、蕎麦を食べて12時に帰宅したとある。多忙な日常生活のなかにあっても、阿部は学生たちと触れ合う時間を大切にしていたことがうかがえる。

学生たちのその後　Abe’s students’ later life

阿部の日記を読むと、面会日として設定された「木曜会」には北住敏夫や林瑞榮など、その後の日本文化研究者として活躍する人々の名前を繰り返し確認することができる。特に北住は戦後、東北大学文学部の国語学国文第一講座の教員として教壇に立つとともに、財団法人阿部日本文化研究所の理事兼所員としても活躍した。彼・彼女たちは、学内外で阿部の薫陶を受けながら、自

身の研究を深めていったのである。

7-1-1 『春樹集』

1945年（昭和20） 東北大学史料館所蔵

法文学部に在籍する学生によって企画され、作成された回覧文集である。勤労動員や入営中の学生総勢31名による詩文や手記のほか、阿部の俳句「開講も餞となりあはれ哉」「廊冷えて講義なき梅雨に入りけり」の２句が収められている。題字は阿部の筆による。

7-1-2 北住敏夫書簡（阿部次郎あて）

1938年（昭和13）11月19日 阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。法文学部を卒業した北住が、岩手中学に奉職している時期に出したもの。『文化』や『文学』といった研究雑誌に論文を投稿し、その「高評」を阿部に願い出ている。

7-1-3 林瑞栄書簡（阿部次郎あて）

1928 年（昭和３） ４月21日 阿部次郎記念館所蔵

新公開書簡。法文学部入試に不合格だったと阿部に報告する内容。阿部が女子学生に対しても親身に指導していた様子を伝える。林は後に無事入学し、岡崎義恵に師事して国文学を専攻、卒業後は山形女子短期大学教授などを歴任した。

７-2 同僚との交流 Socialising with the Colleagues

法文学部の同僚たちと With the colleagues of the Faculty of Law and Literature

東北帝大に在籍中の阿部は、法文学部の同僚たちとも親しく交わった。彼の「日記」を読むと、小宮豊隆や岡崎義恵ら日本文化研究に取り組む同僚たちと公私にわたって交友しており、1940年（昭和15）までは小宮ら特に親しい同僚と新年会を兼ねた書画会を催していた様子が伺える。このほか阿部次郎記念館には、新明正道や武内義雄といった草創期の法文学部を支えた気鋭の研究者たちから阿部宛に出された書簡が遺されている。

小宮豊隆との交友 Friendship with Komiya Toyotaka

法文学部の同僚のなかでも、小宮豊隆とは、ともに夏目漱石に師事していたときから親交があった。『阿部次郎全集』第16巻に収録されている1910年（明治43）４月９日付の小宮宛書簡で、阿部は「唐突な御願だが君の手で十五両許り拵へて貰ふ訳に行くまいか」と金銭貸借の申し入れをしている。法文学部の同僚となって以降は、前述の書画会のほかにも「芭蕉会」を組織して、村岡典嗣や山田孝雄らも巻き込んで日本の古典文学の研究に勤しんだ。両者は、公私にわたって親交をもち、切磋琢磨しながら、日本文化の研究に力を尽くしていったのである。

8-1 日本文化研究所の設立 Establishment of Research Institute for Japanese Culture

肉体の衰え Physical decline

阿部にとっても、日本の敗戦は大きな衝撃だった。さらに1941年（昭和16）12月に上京先で脳卒中により倒れて以来、阿部の肉体は衰え、白内障の進行により視力も奪われていった。

1945年（昭和20）３月の東北帝国大学停年退職の時点で阿部は、①美学の体系的整理、②ゲーテ研究の仕上げ、③日本文化史のまとめ、を目標とし、また８月の敗戦後は日本の行く末を案じ、「文化国家の建設」に寄与することを目指したという。そうした志は、思うにまかせない体調の中で、個人としてではなく研究所を通じた社会への貢献へ向かっていった。

最後の取り組み　Abe's last accomplishment

一方、東北大学では1939年（昭和14）以降、日本文化研究所の設置を計画していたが、実現に至らずにいた。そうした経緯をふまえ、阿部を理事長とする「阿部日本文化研究所」が、1954年（昭和29）開所した。資金は阿部の私財であり、すぐ近くには山田孝雄の住居も設けられた。日本文化の特質を明らかにするという研究目的のもと、東北大学文学部の各分野の教官が多数参加した。

8-1-1　予算決算および事業報告書綴

1955年（昭和30）-1964年（昭和39）　東北大学史料館所蔵／阿部日本文化研究所資料

阿部次郎理事長のもとで運営された昭和29年度以降の事業報告などの書類。昭和30年度の事業計画では、調査研究の冒頭に「国語辞書の編纂」（山田孝雄）が置かれ、以下「中世の国語の研究」（佐藤喜代治）、「古代和歌・歌論の研究」（北住敏夫）と続く。

8-1-2　阿部次郎全集の編纂資料

1960年（昭和35）　東北大学史料館所蔵／阿部日本文化研究所資料

阿部の逝去に先立ち、全集を作成する企画が進められた。それに関わる著作物の一覧とメモが残されている。阿部次郎全集は1960-66年に、『三太郎の日記』刊行により急発展した角川書店から公刊された。

8-2　東北大学と阿部次郎記念館　Tohoku University and Abe-jiro Memorial Hall

東北大学文学部への寄贈　Donated to the Faculty of Arts and Letters, Tohoku University

1960年（昭和35）の阿部の死去に伴い遺族の間で相談があり、研究所は東北大学にその施設の全てを寄附されることとなった。東北大学文学部ではこれをうけ1962年（昭和37）附属施設として、日本文化研究施設を設置し、旧阿部日本文化研究所の建物は米ヶ袋分館として活用されることとなった（後に「阿部次郎記念館」として一般公開）。

日本文化研究施設　Research Institute for Japanese Culture

文学部附属の日本文化研究施設は、日本文化の研究を行う基礎部門に加え、東洋文化との比較研究を目指す比較第一部門、西洋文化との比較研究を目指す比較第二部門などが設けられ、20を超える共同研究など、学際的・国際的な学術研究活動を推進した。

志の継承　Keeping alive Abe's will and aspiration

しかし時代の流れにより、日本文化研究施設は1996年（平成８）にその使命を終え、新設された東北アジア研究センターに受け継がれた。一方で、文学研究科では平成から令和の時期にかけて、「現代日本学」分野の創設や、日本学国際共同大学院プログラムが設けられるなど、日本文化研究をさらに進めるための改組が行われた。阿部の志を継承する教員と学生たちが、世界の中の日本文化を多面的に研究し、着実な成果を世に示すことに期待したい。

8-2-1　日本文化研究所設置理由書

1961年（昭和36）６月　東北大学史料館所蔵／阿部日本文化研究所資料

佐藤喜代治（国語学教授）から大平五郎（阿部次郎女婿）に、設置申請が教授会で確認されたことを報せる書簡に同封されていた。第一部門として「東北文化部」を設けるなど、後の展開とは異なる部分がある。

法文学部開設関係資料 公開展示
ご挨拶

今年は、1907年に東北帝国大学が創設されてから115周年、1922年に法文学部が設置され、文系・理系を擁する総合大学となってから100周年に当たります。東北大学史料館には、法文学部初代学部長である佐藤丑次郎の構想が示された「内申書」が残されております。そこには、東北帝国大学に「新に法文学部を設置して将に総合大学の完成を図らんとす」と書かれており、100年前に文系・理系を備えた総合大学を目指していたことが分かります。本企画展示では、そうした法文学部の歴史をふりかえり、現在の文系学部に至る系譜をたどるものです。

東北帝国大学は創設以降、農科大学、理科大学、医科大学、工学部と理系の分科大学、学部の設置が続いていましたが、大正期に入り、原敬内閣で掲げられた高等教育拡張計画のもと、旧制高等学校、大学の規模拡張が企図される中、東北帝国大学にも文系学部を新設するということが議論されていくようになります。当時の教育制度では、旧制高等学校と帝国大学とは進学ルートにおいて一体的に考えられており、旧制高等学校卒業者には、帝国大学への進学がほぼ約束されていました。高等教育拡張計画では、旧制高等学校の大量新設も予定されていた反面、当時帝国大学の文系学部は、東京・京都だけに存在していたことから、他の帝国大学についても文系学部の増設が必要とされていたのです。

このとき、法学部や文学部と独立した学部を複数設けず、法文学部として東北帝国大学に設置されたのには、予算上の観点からだけでなく、大正時代の教養主義の影響があったといわれています。法学部が法学だけ、文学部が人文学だけの教育研究ではなく、幅広い教養を有する分野横断的な学びを求めたことが法文学部に帰結したということです。その後第二次世界大戦を経て、1949年の新制東北大学発足に際し、法文学部は文学部、法学部、経済学部の3学部として改組され、教育学部が新設されることになります。

法文学部が設置されてからちょうど50年を迎えた頃、文系4学部は誕生の地であった片平キャンパスからの移転が計画されており、1973年までに文系４学部は現在の川内南キャンパスに移転することになります。また、1998年～ 2000年にかけては大学院重点化がおこなわれ、学部を基礎とした教育研究組織から大学院を中心とした組織への移行が進展しました。2004年の国立大学法人化や、2011年の東日本大震災からの復興、2020年以降のコロナ対応など、大学を取り巻く様々な内外の環境の変化の中で改めて文系・理系の総合知が問われている現在、本企画展示が、これからの大学を展望する機会になれば幸いです。

東北大学大学院文学研究科、東北大学史料館

法文学部発足

1922年（大正11）に法文学部が設置され、東北帝国大学は文科系・理科系を完備した総合大学としての基礎を固めました。法文学部には阿部次郎や小宮豊隆といった時代を代表する知識人たちが赴任し、多くの学生たちに多大な感化を与えました。またこれにあわせキャンパスの整備が進められ、片平キャンパスにはコンクリート造りの近代的な校舎が次々と建てられていきました。狩野文庫を中心とする文科系の膨大な研究図書を納めるため建てられた図書館は、現在は大学の歴史資料を伝える史料館として使われています。

9-1 『附属図書館第二部館務日誌』

1923年（大正12）東北大学史料館所蔵／附属図書館移管文書『第二部館務日誌　大正十一年八月』

法文学部に赴任した教授たちのあいさつ、打ち合わせや留学先で購入した図書の受入等に関する記事が見られる。

9-2 「北京風俗図譜」の制作に関する青木正児書簡

1924年（大正13）東北大学史料館所蔵／附属図書館移管文書『[留学教官購入図書精算関係書類]』

北京で修学中の青木が、近代化により失われてゆく市井の風俗を記録するために画師を雇って図譜を作成したい、と図書館長であった武内義雄教授に書き送ったもの。その結果作成されたのが、現在本学附属図書館に所蔵されている「北京風俗図譜」である。

9-3　法文学部創立委員長の意見書

1922年（大正11）7月8日　東北大学史料館所蔵／総務部総務課移管文書『法文学部関係規程綴』

法文学部の創立に際し、委員長である佐藤丑次郎京都帝大教授（東北帝大法文学部初代学部長）がとりまとめて総長に提出した意見書。法科・文科を融合した学部としての長所・特色とその講座などについて詳細に述べている。こうした法文学部の構想については、京都帝国大学で構想されながら実現に至らなかった構想が参考にされたと言われている。

9-4　法文学部女子学生の受講ノート

東北大学史料館所蔵／橘内（石母田）英次文書

岡崎義恵教授『日本文芸の潮流』の受講ノート。石母田氏は卒業後、日本放送協会のアナウンサーとして活躍した。

9-5　卒業式記念講演会要旨　織田萬「常設国際司法裁判所に就て」

1931年（昭和６）３月26日　東北大学史料館所蔵

1929年（昭和４）の卒業式復活にあわせて、各界の著名人を招いての記念講演会が式の内容に盛り込まれることとなった。この年の講演者は、日本初の常設国際司法裁判所判事となった京都帝国大学教授・織田萬と、東京帝国大学教授の動物学者・五島清太郎。講演の記録は要旨として記録化され残されている。

9-6　法文学部時間割

1931年（昭和６）４月　東北大学史料館所蔵／橘内（石母田）英次関係資料

午前は８時から12時まで４時限（１時限60分）で１コマ60～120分、午後は１時から５時半まで３時限（１時限90分）で１コマ90分～120分であった。土曜日は午前に１コマ60分～240分の講義があり、午後は学校教練に充てられている。

法文学部から文系４学部へ（片平キャンパス）

法文学部が創設10周年を迎えると、1933年（昭和８）に教育方針とカリキュラムの大幅な改正が決定し、翌年4月からこれを実施しました。法文学部の学生は、「法科」、「文科」、「経済科」のいずれかを選択し、より専門的な教育が施されることになりました。しかし、戦火が激しさを増して、学問研究に対する抑圧が強まり、国策への協力も当たり前のこととされるようになると、学業半ばで徴兵され戦地に赴く学生が数多く現れました。戦争が終わると、法文学部は再編が進み、1949年（昭和24）、現在の文系４学部が設置され、新制東北大学として整備されていきます。そして、駐留軍キャンプ跡地であった川内・青葉山地区が移管されると、全学的移転計画が進められていきます。

10-1　小宮豊隆書簡

1944年（昭和19）10月18日　東北大学史料館所蔵

小宮豊隆が、北海道帝国大学予科教授の柴田治三郎（昭和21年9月から東北帝国大学法文学部助教授）に宛てた書簡。小宮はこの書簡の中で、「学徒動員には絶対反対である」と、学問を捨てなければできない労働を学生に強いていると批判。しかし、時局への認識が足りないと言われれば反論できないと、複雑な心情を吐露している。

10-2　勤労動員前に受けた講義の時間割

1945年（昭和20）１月　東北大学史料館所蔵

東北帝国大学報国隊第四大隊に所属する法文学部の１年生が、群馬県伊勢崎市への勤労動員に向かう前に受けた「勤労動員出動学徒ニ対スル特別講義」の時間割。

10-3　創立50周年記念式典総長式辞自筆草稿／総長使用と伝わる万年筆

1957年（昭和32）６月22日　東北大学史料館所蔵

総長の高橋里美は式辞の中で、東北大学の伝統である「研究第一主義」が、今後も変わらず重要であると語っている。また、本学に数多く設置され、その特徴の一つといえる研究所の中に、人文科学系のものがないことを「極めて遺憾」と述べ、自然科学と人文科学の極端なアンバランスを「危険を孕むもの」とする指摘は、文系総長ならではといえる。

10-4　法文学部発祥の地記念碑

1973年（昭和48）10月25日　東北大学史料館所蔵

1973年（昭和48）10月25日、文学部で開かれた第452回教授会で、金谷治から法文学部50周年記念事業として計画された記念碑が完成し、除幕式や記念パーティーを開催することが報告さ

れている。

伝統から未来へ（川内キャンパス）

1973年（昭和48）までに文系学部は川内キャンパスに移転し、同時期に図書館も新築され、新たなキャンパスでの活動を始めました。1960 ～ 80年代は、教養教育と専門教育の関係づけをめぐる葛藤が表面化し、学生運動により既存の大学のあり方が問われた時期でした。1984年の広域科学部構想、1993年の教養部廃止、その後の大学院重点化などの荒波の中で、文系の教員が良識を掲げて行動した結果は、現在の大学組織の中にも痕跡を残しています。学際的研究や文理融合、さらには国際的な研究の必要性が叫ばれる中で、東北大学の文系学部が担う役割は、以前にも増して大きくなっています。

11-1　東北大学の「至宝」展

2007年（平成19）

大学創立100周年を記念し、磯部彰教授（東北アジア研究センター）を中心に、文学研究科や史料館、総合学術博物館および附属図書館の教職員が集い、東京と仙台と二か所で大規模な展示を実施した。さらに東京会場の江戸東京博物館と合同で、漱石文庫を中心とする展示が派生し、2つの展示の成果が書籍化された。こうした活動などを通じて、東北大学の文化財は、より広く知られるようになった。

11-2　宗教による癒しの提供

2011年３月の東日本大震災以来、被災者の心のケアのために地元の宗教者、医療者、研究者が連携して行なってきた「心の相談室」の活動を踏まえて、「実践宗教学寄附講座」が文学研究科に設立された。諸宗教が協力し合い、学び合う環境をととのえ、専門職の育成を続けており、現在に至る17冊のニュースレターでその歩みを知ることができる。展示しているのは最新17号から「10年の歩み」。

11-3　学知を広げる

2005年発足の「有備館講座」が画期となり、文学研究科の市民講座が発展を続けている。県北（大崎市）に続き、2008年から県南（丸森町）で「斎理蔵の講座」も始まった。大学の知を広げる活動は、今年３月刊行の『人文社会科学の未来へ――東北大学文学部の実践』や『日本学の教科書』などにも、脈々と受け継がれている。

阿部次郎記念館新規資料 公開展示 ご挨拶

大正時代から高度経済成長期頃まで青年たちの必読書とされる随筆がありました。それは 1914 年に刊行された『三太郎の日記』。深い自己省察に基づき、近代的自我の独自として共感を呼び、一時代を築くベストセラーでした。現在でも東北大学川内キャンパスには、この随筆にちなみ、思索するのに最適な散策コースとして「三太郎の小径」が設けられています。この『三太郎の日記』の著者である、阿部次郎の足跡を、新規資料とともに紹介し、東北大学に根ざしてきた文系の知にふれる企画展示をこの度、開催いたします。

東北帝国大学に文系の学部が設置されたのは、1922 年 8 月のこと、勅令第三九六号によって法文学部が誕生します。翌年 1923 年に美学講座が設けられると、その初代教授に招へいされたのが阿部次郎でした。阿部次郎は山形県の出身で、第一高等学校、東京帝国大学文科大学を卒業後、夏目漱石の門下に入ると、本格的に文筆活動を開始、「東京朝日新聞」の「朝日文芸欄」で頭角をあらわすと、『三太郎の日記』、『人格主義』などの著作を相次いで刊行、大正教養主義・人格主義を象徴する人物として名声が高まっていた中での任官でした。

阿部次郎は、東北帝国大学に着任する前に、1 年半ほどヨーロッパを外遊しています。ここで阿部は日本文化を世界的な視点から捉えようとする、その後の研究の基礎を形成することになります。東北帝国大学法文学部教授として仙台に赴任後は、美学を講義し、ダンテ、ゲーテ、ニーチェなどを紹介する一方で、『徳川時代の芸術と社会』を刊行するなど、東西芸術を比較しながらその価値を見いだしていきます。また、同時代の作家、歌人、俳人、画家、演劇人らと幅広く交流があったことから、文科系の初代教授陣の人選を中心的に担い、夏目漱石門下の終生の友人で独文学者の小宮豊隆、西洋芸術史の児島喜久雄や英文学者の土居光知らを招き、今日の東北大学の文系における学知の基礎を築くことになりました。1941 年から 1942 年までは、第 7 代法文学部長を務め、戦時下の困難な中での学部運営も担っていくことになります。

1945 年に東北帝国大学を退官後は、国語学者の山田孝雄や国文学者の角川源義らの協力を得て、1954 年に財団法人阿部日本文化研究所を設立し、1959 年に死去するまで晩年も思索や研究を続けました。阿部次郎死去後、同研究所は東北大学文学部に寄附され、敷地建物は現在「阿部次郎記念館」として一般公開されています。阿部次郎記念館にはこれまで未公開の資料が保管されていましたが、2020 年に資料群が東北大学史料館に寄託され、文学研究科の協力も得ながら、整理公開が進められています。今回の企画展示はその成果も盛り込まれています。どうぞご観覧ください。

東北大学大学院文学研究科、東北大学史料館

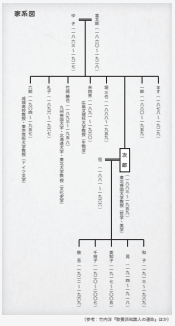
生家と家族
Family and Birthplace

生い立ち
Early Days

阿部次郎は 1883 年 (明治 16)、山形県上郷村 (現・酒田市) に父・富太郎と母・ゆきの次男として生まれた。阿部家は地域で庄屋格であり、8 人兄弟のうち次郎を含め 4 人が学問の道に進んでいる。鶴岡の荘内尋常中学校に入学して実家を出た阿部は、級友と自炊寮で生活する中で次第に哲学への志望を固めていく。

中学校放校から上京へ
Expelled from School

1898 年 (明治 31) に父・富太郎の転任で山形中学校へ転校した。しかしも年次の 1900 年 (明治 33)、学生の自由を過剰に戒める校長に対して排斥事件を起こし、放校処分を受ける。高等学校進学には中学を卒業せねばならず、行き場を求めて阿部は上京。結局、翌 1901 年 (明治 34) に私立京北中学校に入学、約半年の在籍の後に無事卒業し、卒業式では学生総代として証書を受けとった。



(参考：竹内洋『教養派知識人の運命』 より)

一高から東大へ
Getting into The First Higher School and Then to The Imperial University of Tokyo

第一高等学校での出会い
Meeting friends in The First Higher School

阿部は 1901 年 (明治 34) に第一高等学校に入学する。寮生活を共にした岩波茂雄は生涯の友人となった。『校友会雑誌』の編集を通じて斎藤茂吉、安倍能成、魚住影雄らとも出会う。1903 年 (明治 36) には後輩の藤村操が華厳滝に投身自殺し、青年層の「煩悶」の問題が注目された。第一高等学校での出会いは、人間のあり様を問う倫理学の道へと阿部をいざなっていく。

青年時代の次郎 (阿部次郎記念館所蔵)

哲学の道への助走
The path to a career in Philosophy

第一高等学校は「勤倹尚武」と呼ばれるバンカラな校風が伝統とされたが、阿部は『校友会雑誌』に『校風と自治と』(126 号、1903 年 4 月 30 日) を寄稿し、特定の道徳規範で学生の内面的自由を束縛することを批判した。後の教養主義者の姿はこの頃から垣間見える。1904 年 (明治 37) には東京帝国大学文科大学哲学科に進学し、ケーベルや大塚保治の指導を受け 1907 年 (明治 40) に卒業。卒業論文は「スピノザの本体論」である。

夏目漱石との出会い
Meeting Natsume Soseki

高等遊民になる
Chose to be a "Kotoyumin (graduates who choose to be unemployed)"

阿部が大学を卒業したのは 1907 年 (明治 40)。しかし、この頃の大学卒業生は就職難であった。日露戦争 (1904 ～ 05) も終わり、日本は一応の近代国家としての体裁を整えた。西洋学問を修めれば栄達が保障された時代は過ぎていた。俗世間に入ることを好まなかった阿部は、高等教育を受けながら就職をしない「高等遊民」として日々を送る。

漱石門下に
Becoming a disciple of Soseki

阿部と夏目漱石は第一高等学校や東京帝国大学で学生と教員の関係にあり、その頃から一定の面識はあった。しかし、阿部が漱石を直に訪ね、その門下となるのは、東京帝大卒業から 2 年後の 1909 年 (明治 42) である。職も無く高等遊民の状態にあった阿部は、この年漱石が「東京朝日新聞」に投げた「朝日文芸欄」で筆を執るようになる。

漱石書簡 (阿部次郎記念館所蔵)　漱石「それから」に対する阿部次郎の批評に答える内容

夏目漱石と阿部次郎
Natsume Soseki and Abe Jiro

自然主義文学との論争
The controversy surrounding naturalism

阿部は 1909 年 (明治 42) 12 月に「驢馬と思義」で「朝日文芸欄」にデビューする。その内容は、自然主義派の雑誌『早稲田文学』に対し、永井荷風の小説を称賛するのは彼らの「自然主義」という観念が曖昧だからだと批判するものであった。時代の文芸思潮は自然主義全盛であったが、以後阿部はこれに対抗する漱石門下の一翼を担っていく。

漱石と阿部次郎
Soseki and Abe Jiro

漱石の下で文筆家としての歩みを始めた阿部だが、二人の思想は同じであったわけではない。あくまで創作を通じて人間を描いた漱石に対し、阿部は直接的に人間の内面や人格の問題に向き合う道を選ぶ。『門下生の書いたものっうちに、先生が心から同感されたものはどれほどあったか』『門下生に服かに取巻かれてゐながら、思想上並びに芸術上、随分寂寞を感じてゐられた』と阿部は漱石の孤独を察していた (『夏目先生のこと』)。

岡本一平画「漱石先生」(東北大学附属図書館　漱石文庫所蔵)

『三太郎の日記』の刊行
Publishing "Santaro's Diary"

文筆家としての活動
Abe Jiro as a writer

「朝日文芸欄」でデビューした阿部は、美学の研究を進める傍らで、文筆活動を積極的に行っている。1911 年 (明治 44) には、漱石門下の仲間である小宮豊隆・安部能成・森田草平との合著『影と声』(春陽堂) を刊行。同年、斎藤茂吉の勧めで歌誌『アララギ』に「奥人の歌」を発表。その翌年には『読売新聞』の客員として随筆「三太郎の日記」ほかを寄稿するなど、文筆家としての存在感を高める。このような活動が、著書『三太郎の日記』の刊行につながっていく。

『影と声』出版記念写真 (阿部次郎記念館所蔵)
前列左から小宮豊隆・安倍能成
後列左から森田草平・阿部次郎

『三太郎の日記』の刊行
Publishing "Santaro's Daiary"

1914 (大正 3) 年 3 月、阿部は出版社・東雲堂からの申し入れにより、単行本「三太郎の日記」を刊行する。同書は『愚か者』の意味を持つ「三太郎」という名の人物 (青田三太郎) を筆者に擬し、随筆・評論・小説・詩など様々なジャンルの文章を収めている。だが阿部にとって、それらの文章は『人生と自己とに対して素朴な信頼を失った疑惑の時代から、少しく此信頼を恢復し得るようになった今に至るまでの』、『自分の内面生活の最も直接な記録』(『三太郎の日記』自序) という意味を持つものであった。

同書は好評を博し、翌年には、友人・岩波茂雄が興した岩波書店から続編にあたる『三太郎の日記・第弐』を刊行。1918 年 (大正 7) には 2 冊の内容と、『第弐』以降に執筆された文章をおさめた『合本 三太郎の日記』(岩波書店) を刊行する。

『三太郎の日記』の名声
Abe Jiro's Santaro's Diary Fame

高まる名声
Becoming a bestseller

阿部は「千人以上の人に向ってぼくの書いたものを読んで下さいと云い得る程立派なものとはとても思われません」(東雲堂・西村陽吉宛書簡、未投函) というように、『三太郎の日記』が多数の読者を得る書籍になるとは考えていなかった。だが、『三太郎の日記』は刊行の直後から多くの賞賛が寄せられ、ベストセラーとして広く読まれていく。刊行の 2 ヶ月後に『少し評判がよすぎる』、『僕は今僕に許された fame の絶頂に立っているのではないかしらと思う事がある』(『形影の問答』、『三太郎の日記・第弐』に収録) と阿部自身が記しているように、同書の成功によって阿部は文筆家としての名声を得るのである。

『三太郎の日記』広告 (『アララギ』1914 年 6 月)
広告文中の「著者の友人の一人」は和辻哲郎と推測されている

青年たちの愛読書
Young boys' favourite book

谷川徹三「阿部次郎氏の『独歩の経験』」
(『帝国大学新聞』1934 年 3月 19日)

特に『三太郎の日記』の熱心な読者となったのは、旧制高等学校の生徒や大学生などの青年たちであった。例えば哲学者・谷川徹三は、第一高等学校の在学中に『三太郎の日記』を読んで感銘を受け、阿部の家を訪ねて教えを乞い、後年に至っても最も影響を受けた人物として阿部を挙げている。谷川が『旧制高等学校の学生の一度は読むべき本』(『百年の名著 三太郎の日記』、『朝日新聞』1969 年 6 月 23 日) というように、『三太郎の日記』は第二次世界大戦後に至るまで、教養を求める青年たちの愛読書であり続けた。

阿部次郎の「人格主義」
Abe Jiro's "Personalism"

『人格主義』の刊行
Publishing "Personalism"

1921 年 (大正 10)、39 歳の阿部は、満州・朝鮮での講演をもとに、『人格主義の思潮』をまとめあげた。同書に論文数編を加えた『人格主義』が、翌年に岩波書店から刊行されている。明治の立身出世主義に対する違和感を表したのが『三太郎の日記』であるとすれば、その目指すところを理論的に構築し、教養の立場から大正期の時代性を明確に示したのが『人格主義』であった。『人格の成長と発展とに至上の価値を置』き、『物質主義と正反対の立場』に立った結果、社会主義思想や、後には軍国主義からの攻撃を受けた。一方で単なる理念や信仰にとどまらず、より積極的に不断の努力を説いた点が近年注目されている。

吉野作造 (1878-1933) は宮城県出身の政治学者。阿部を満鉄講演会の講師に推薦し、『人格主義』執筆のきっかけを与えた。また阿部を黎明会に誘い、森戸と近づけた。1922 年 (大正 11) 3 月撮影 (吉野作造記念館所蔵)

竹内仁の批判
Criticism of Abe's personalism by Takenouchi Masashi

最初に批判者として現れたのが、東京帝国大学の後輩でもある竹内仁 (1898 -1922) であった。彼は第二高等学校在籍中に阿部に傾倒したが、その後に社会主義思想の立場から阿部の意見 (所得の増加は労働者を本質的に幸福にするものではない等) に対し、実践的には無価値でありブルジョア的であると批判した。阿部の思想を十分受け止めた上での批評として、注目されることも少なくない。

東北帝国大学への赴任
New Academic Post at Tohoku Imperial University

新たな文系学部への志向
Jiro's expectations to newly established Faculty of Arts

『人格主義』刊行の際に付加された『余論』の一部に、1920 年 (大正 9) 2 月の講演記録があった (竹内仁も聴衆の一人)。東京帝国大学の経済学部助教授だった森戸辰男が、無政府主義思想を紹介したため逮職・下獄に至った事件に対し、森戸擁護を主張した内容である。阿部は講演で国家と大学の関係を論じ、森戸を、ひいては大学の独立を守れない東京帝国大学のあり方を批判する。また書簡で黎明会の同志に森戸擁護を訴えるだけでなく、実際に裁判関係者と議論もしている。こうした活動と並行して、阿部の中に『新しい精神の文科大学』や『プロフェッサーとしての仕事』を志向する想いが醸成されていた。

仙台への赴任
Moving to Sendai

佐藤丑次郎 (1877-1940) は山形県出身の法学者。京都帝国大学法学部教授を経て、東北帝国大学法文学部の初代学部長として、阿部の教授就任を実現させた。(東北大学史料館所蔵)

ちょうどその時期に、東北帝国大学に法文学部が新設されることになった。1920 年に創立委員長となった佐藤丑次郎は、京都帝国大学の法学部教授 (政治学) であったため、文学系の新たなスタッフの中心人物として、阿部次郎に注目した。田辺元の仲介による佐藤の要請を受け、仙台への赴任を決めた 40 歳の阿部は、同僚になる教授たちをスカウトし、教授就任に先立ち外遊に旅立つことになる。

ヨーロッパ外遊と日本文化への目覚め
A Trip to Europe and a Cultural Awakening

ヨーロッパ外遊とその目的
The purpose of the trip

1922 年（大正 11）5 月 7 日から翌年 10 月までの 1 年半、阿部は文部省の在外研究員としてヨーロッパ外遊を果たした。「その土地でなければ見られぬものを見、其処に住まなければ接し得ぬ生活に接することを主眼」とし、「美術館を出来るだけ丁寧に歴訪すること」と「実際生活を味解すること」が目的であったという（「游欧雑記」）。実際にドイツ、イタリア、エジプト、ベルギー、フランス、イギリスなど各国を訪れ、ルーブル美術館や大英博物館など現地を代表する施設を巡った。行動を共にしたのは東北帝国大学教授（美学・美術史の初代）・福井利吉郎、同助教授・児島喜久男、美術コレクターとして知られる原三溪の長男・善一郎、画家の小林古径や前田青邨らであった。福井は大英博物館の名品として知られる顧愷之筆「女史箴図巻」の模写（附属図書館蔵）を小林古径と前田青邨に依頼しているが、その制作に際しては阿部の存在も無関係でなかったとみられる。この外遊は 1923 年（大正 12）9 月 2 日にもたらされた関東大震災の報で終わりを告げ、予定を切り上げて 11 日に欧州を出航、10 月 20 日に東京へ帰着することとなる。

ルーブル美術館で受けたショック
The Louvre and Abe's culture shock

1923 年（大正 12）、連日にわたってルーブル美術館を訪れた阿部の感想が「仏英日記」に書き留められている。特に 7 月 28 日条は東西の芸術を比較して受けたショックを率直に綴っており、その文芸観を知るうえでも重要な記述となっている。「日本の浮世絵を見てからコロー、モネ、ドガなどを見ると、やはり後者の方が芸術の正道を踏んだものだという気がする。…（浮世絵は）人生の片隅におしこめられた者の鬱憤晴らし、軽口、迎合、色好み等の下品さに似たものを持っている。…これでは本当の芸術が出来っこないと思う。…芸術を人生の最高最深の Interesse（興味）と結合し得る位置に置け。さうして其処で日本人の Bon Sens（良い感覚）を育てよ。…さうするのが将来の日本芸術を育てる道である。僕はこのコレクションを見て自分の国が恥かしかった。」帰国後、この経験を踏まえて江戸時代における芸術性の優れた点について論述したのが、「徳川時代の芸術と社会」であった。

『徳川時代の芸術と社会』の刊行
Publication of "Art and Society during the Tokugawa Period"

刊行の経緯と執筆目的
The story behind its publication

1931 年（昭和 6）6 月に刊行された『徳川時代の芸術と社会』は、1925 年（大正 14）9 月号から文芸誌「改造」に連載された「遊欧雑記―芸術の社会的地位に就いて」を収録したものであり、各編によって執筆時期が異なっている。

「前編」1925 年 8 月～翌年 9 月　「追補」1927 年 4 月
「後編」文学論　1927 ～ 1929 年・浮世絵論　1931 年

本書執筆の目的については、「先の外遊から帰国の途につく際、私の心は日本を如何にすべきかといふ大きい問題を背負って来た」ことを承け、「その解答に対する準備作業の成績を茲に報告する」ことと阿部自らが記している。同じ「自序」には「歴史家としての責任」の語が認められ、歴史学者の立場から論じた内容であったことも判明する。

阿部が論じたかったこと
What Abe tried to discuss in the book

本書最大のテーマは、「江戸時代の平民芸術（浮世絵）や文学は恋愛をどう取り扱ったか、それは恋愛文化の向上にいかに貢献し、恋愛文化の発展にいかに影響したか」である。

外遊によって実感した東西芸術の違いをヒントとし、江戸時代の芸術も評価に値することを論じる。まず、西洋芸術は性欲生活を「倫理化」しているゆえに、それを「美化」した東洋芸術よりも優れているとの考え方を示す。阿部は男女ともに一個人、一人格として信頼と愛着をもって相手に接することにより、はじめて「性生活」に倫理的な基礎が与えられるという。一方、日本では女性を一人格として見ることが遅れているとし、「すべて男女の道は嗣を立つるのみなり」という儒教思想が根付いているのに大きな問題があるとみた。

性における倫理的根拠が「子孫の継続」「後継ぎの誕生」の意義のみに置かれているのは人情に疎く、不自然な性的道徳はここから起こり、それは阿部の生きた時代も同じだと断じる。つまり、性は純粋に人格的に愛し合った結果でなければならないと考えたのである。

それではなぜ、江戸時代の芸術を評価できるものとしてとらえたのか。阿部は浮世絵や文学は完全に性を「美化」しているのでなく、「倫理化」の要素が認められるという。男女における「情趣」は特に「遊郭」の文化において発展し、西鶴や近松の文学、さらに浮世絵にはそれが反映するため、純粋な「恋愛」の要素が存在していると看破したわけである。

阿部次郎と左翼運動
Abe Jiro and Leftist Movement

社会主義との論争
Controversy surrounding socialism

資本主義の進行により社会的矛盾や貧困問題が顕在化すると、社会主義が日本でも注目されるようになる。さらに、1917 年（大正 6）に起きたロシア革命は、日本の知識人により社会主義を浸透させていくこととなった。阿部は、社会主義を「誇張せられた革変」とし、影響下にあった労働運動に対しても批判的な立場をとった。そのため、社会主義者の間から、阿部の人格主義への痛烈な批判が起こった。

長女・和子の検挙
Arrest of Jiro's eldest daughter, Abe Kazuko

1930 年（昭和 5）4 月、東京女子高等師範学校に入学した阿部の長女・和子（1913-1989）は、翌年 10 月に無産青年同盟女高師連盟に参加していたことを理由に治安維持法違反で検挙された。阿部は、左翼思想に傾倒する長女に対して説諭を試みるも、和子の意志は固くその後も検挙を繰り返した。阿部の人格主義は、実の娘からも批判されることとなる。阿部は和子の検挙をきっかけに、1926 年（大正 15）以来続けていた大学評議員を、1932 年（昭和 7）1 月辞職している。

家族とともに自宅庭で　1939 年（昭和 14）8 月撮影（阿部次郎記念館所蔵）
前列左から妻勢・三女千枝子・次女美知子　後列左から長女和子・次郎・次男敬吾

軍国主義との対立
Anti-Militarism

文系軽視への批判
Criticism of the growing disrespect to arts and humanities

戦時下においては、武器製造など戦争に貢献できる理系研究が推奨される一方、文系の学問を軽視する意見が強くあった。1944 年（昭和 19）8 月、総長の熊谷岱蔵（1880-1962）は、今後の大学の方向性について、教員に諮問を行っている。その中で阿部は、「あらゆる研究及教育の継続は時局の急迫中に於いても依然として必要なり。教育を軽視する戦争は航空者の養成と補充を怠る航空作戦の如し」と回答するとともに、文系の学問拡充の必要性を訴えている。

出陣する学生へのはなむけ
Sending a farewell message to students going to the war

1943 年（昭和18）10 月、法文学部文科に入学した原田夏子（1921-2022）の回想によれば、この年の阿部の「美学概論」には多くの立ち見学生も現れるほどの盛況であったという。そこで阿部は、徴兵を待つ学生に向けて、今後「大学とは異質の軍人の世界に文盲との戦いが待っている」と語り、彼らへのはなむけとした。軍人に対して、学問や芸術の本質を理解できない「文盲」と呼んで憚らない阿部の大学人として覚悟を示すエピソードと言えよう。

昭和 19 年熊谷岱蔵総長が行った諮問に対する主な教員の回答

学部	教員	回答の要旨
法文学部（ドイツ哲学）	小笠豊隆	時局の要請から法文系学問が、戦争遂行上、一定程度まで犠牲にされるのは致方ない。之程度迄正しい学問を進む行方を之と心得ます。
法文学部（イタリア哲学）	金倉圓照	戦時態度中の学生と教員の連絡接触を密にするため、教員は学生と同居に、かつ夫婦的に生活第一義に、学生の犠牲に当ちて一考。
法文学部（日本史）	中田薫之助	経済第一方面天原の戦時用力を尽くさねばならぬ。…（中略）…戦争の時間を利用して、…（中略）…文化の保存に努めたい。
法文学部（経済学）	中村宗夫	戦時態度と学問研究は両立しない。1・2 年生には学問を、3 年生以上からは戦争に専念いたすべきで、また学生課の職員を戦場第一、学生を保護致度さ存ず。
理学部（生物学）	元村勇	戦時の時間制度を組ませ、勉のような少人数教育を行うべき。
理学部（地質学）	村上元博	現在は学生の存在を認めておらず、すべて労働者となるべきと考えるべきである。教育について深くしかも無関である。
工学部（機械工学）	宮城音五郎	国家の存亡に際しては、学徒を中止すべき。戦時態度に進んで参加すべきか、身を保存すべき、全学生を一律に教育すべきか。
工学部（電気工学）	増澤泰	戦況が厳迫し大東亜決戦の時期に入ったる今日、研究と教育の為に、学徒の学生は、生産に専念すべきか、否か。学生のエネルギーを最大限度に発揮すべきことである。

※典拠「学徒動員態度に関する教授の意見」（昭和 19 年）（東北大学史料館所蔵）

学生との交流
Relationship with Students

教育者として
As an educator

阿部は学生から慕われた教員であった。法文学部美学講座教授として教鞭を執る日々にあって、阿部は毎週木曜日を「面会日」と定め、自宅で学生たちと親睦を深めていた。阿部の日記の 1934 年（昭和 9）4 月 26 日条をみると、面会のあと残った数名と花見に出かけ、蕎麦を食べて夜 12 時に帰宅したとある。多忙な日常生活のなかにあっても、阿部は学生たちと触れ合う時間を大切にしていたことがうかがえる。

学生たちのその後
Abe's students' later life

阿部の日記を読むと、面会日として設定された「木曜会」には北住敏夫や林瑞榮など、その後の日本文化研究者として活躍する人々の名前を繰り返し確認することができる。特に北住は戦後、東北大学文学部の国語学国文第一講座の教員として教壇に立つとともに、財団法人阿部日本文化研究所の理事兼所員としても活躍した。彼・彼女たちは、学内外で阿部の薫陶を受けながら、自身の研究を深めていったのである。

東北帝国大学文芸部主催の講演会後の記念写真
席で向手を机にのせている人物が細田直弟、その左は喜藤茂吉（尚毛講演者）。さらにその左に阿部次郎部長　1928 年（昭和 3）5 月（東北大学史料館所蔵）

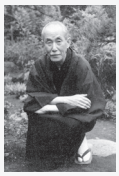
同僚との交流
Socialising with the Colleagues

法文学部の同僚たちと
With the colleagues of the Faculty of Law and Literature

東北帝大に在籍中の阿部は、法文学部の同僚たちとも親しく交わった。彼の「日記」を読むと、小宮豊隆や岡崎義恵ら日本文化研究に取り組む同僚たちと公私にわたって交友しており、1940 年（昭和 15）までは小宮ら特に親しい同僚と新年会を兼ねた書画会を催していた様子が伺える。このほか阿部次郎記念館には、新明正道や武内義雄といった草創期の法文学部を支えた気鋭の研究者たちから同部宛に出された書簡が遺されている。

総長謝恩会の記念写真（工学部講義室）1937 年（昭和 12）撮影
（東北大学史料館所蔵）

小宮豊隆との交友
Friendship with Komiya Toyotaka



小宮豊隆（東北大学史料館所蔵）

法文学部の同僚のなかでも、小宮豊隆とは、ともに夏目漱石に師事していたときから親交があった。『阿部次郎全集』第 16 巻に収録されている 1910 年（明治 43）4 月 9 日付の小宮宛書簡で、阿部は「唐突な御願だが君の手で十五両許り捻へて貰ふ訳に行くまいか」と金銭貸借の申し入れをしている。法文学部の同僚となって以降は、前述の書画会のほかにも「芭蕉会」を組織して、村岡典嗣や山田孝雄らも巻き込んで日本の古典文学の研究に勤しんだ。両者は、公私にわたって親交をもち、切磋琢磨しながら、日本文化の研究に力を尽くしていったのである。

日本文化研究所の設立
Establishment of Research Institute for Japanese Culture

肉体の衰え
Physical decline

阿部にとっても、日本の敗戦は大きな衝撃だった。さらに 1941 年（昭和16）12 月に上京先で脳卒中により倒れて以来、阿部の肉体は衰え、白内障の進行により視力も奪われていった。1945 年（昭和 20）3 月の東北帝国大学停年退職の時点で阿部は、①美学の体系的整理、②ゲーテ研究の仕上げ、③日本文化史のまとめ、を目標とし、また 8 月の敗戦後は日本の行く末を案じ、「文化国家の建設」に寄与することを目指したという。そうした志は、思うにまかせない体調の中で、個人としてではなく研究所を通じた社会への貢献へ向かっていった。

還暦祝賀会（6 年間延期 1 949 年（昭和 24）8 月開催）で贈られた肖像画（原精一画／阿部次郎記念館所蔵）

最後の取り組み
Abe's last accomplishment

一方、東北大学では 1939 年（昭和 14）以降、日本文化研究所の設置を計画していたが、実現に至らずにいた。そうした経緯をふまえ、阿部を理事長とする「阿部日本文化研究所」が、1954 年（昭和 29）開所した。資金は阿部の私財であり、すぐ近くには山田孝雄の住居も設けられた。日本文化の特質を明らかにするという研究目的のもと、東北大学文学部の各分野の教官が多数参加した。

山田孝雄旧居跡　次女で俳人の山田みづえと合同の碑文が刻まれる

東北大学と阿部次郎記念館
Tohoku University and Abe-jiro Memorial Hall

東北大学文学部への寄贈
Donated to the Faculty of Arts and Letters, Tohoku University

1960 年（昭和 35）の阿部の死去に伴い遺族の間で相談があり、研究所は東北大学にその施設の全てを寄附することとなった。東北大学文学部ではこれをうけ 1962 年（昭和 37）附属施設として、日本文化研究施設を設置し、旧阿部日本文化研究所の建物は米ヶ袋分館として活用されることとなった（後に「阿部次郎記念館」として一般公開）。

1964 年（昭和 39）6 月 6 日
文学部附属日本文化研究施設開所式
（東北大学史料館所蔵）

日本文化研究施設
Research Institute for Japanese Culture

文学部附属の日本文化研究施設は、日本文化の研究を行う基礎部門に加え、東洋文化との比較研究を目指す比較第一部門、西洋文化との比較研究を目指す比較第二部門などが設けられ、20 を超える共同研究など、学際的・国際的な学術研究活動を推進した。

日本文化研究施設に関わった教官の一覧

部門	教授	助教授	講師	助手
第一	山田孝一郎（第1人類学） 大内志朗（キリスト教史） 金子敬（美学） 佐藤信（科学史）	中澤義之（考古学） 佐藤昭夫（心理学）		藤田豊八（国語学） 藤堂明保（中国語学） 村山義太（国語学） 中村光夫（国文学） 佐久間鼎（比較言語学） 佐藤伸夫（日本思想史） 小山靖子（心理学）
第二	高橋三郎（中世史） 井上秀雄（日朝関係史） 小山靖憲（中国史） 山崎義光（中国史）	渡邊信夫（日本近代史） 田崎一郎（社会人類学） 藤川昌久（第2人類学）		中嶋敏夫（中国語学） 藤堂明保（言語学） 石井仁（東洋史） 小林宏道（日本史）
第三	佐々木高明（民族学）	大田俊一郎（日本思想史） 佐藤伸夫（比較文学）		藤野岩友（言語学） 鹿子木孝夫（社会学） 森本良一（地文学） 宮坂宥勝（言語学）

1 ※出所「阿部次郎記念館」（日本文化研究所パンフレット）
2 ※出所「日本文化研究所」（日本文化研究所パンフレット）（1966 年以降）

志の継承
Keeping alive Abe's will and aspiration

しかし時代の流れにより、日本文化研究施設は 1996 年（平成 8）にその使命を終え、新設された東北アジア研究センターに受け継がれた。一方で、文学研究科では平成から令和の時期にかけて、「現代日本学」分野の創設や、日本学国際共同大学院プログラムが設けられるなど、日本文化研究をさらに進めるための改組が行われた。阿部の志を継承する教員と学生たちが、世界の中の日本文化を多面的に研究し、着実な成果を世に示すことに期待したい。

法文学部開設関係資料 公開展示 ご挨拶

今年は、1907 年に東北帝国大学が創設されてから 115 周年、1922 年に法文学部が設置され、文系・理系を擁する総合大学となってから 100 周年に当たります。東北大学史料館には、法文学部初代学部長である佐藤丑次郎の構想が示された「内申書」が残されております。そこには、東北帝国大学に「新に法文学部を設置して将に総合大学の完成を図らんとす」と書かれており、100 年前に文系・理系を備えた総合大学を目指していたことが分かります。本企画展示では、そうした法文学部の歴史をふりかえり、現在の文系学部に至る系譜をたどるものです。

東北帝国大学は創設以降、農科大学、理科大学、医科大学、工学部と理系の分科大学、学部の設置が続いていましたが、大正期に入り、原敬内閣で掲げられた高等教育拡張計画のもと、旧制高等学校、大学の規模拡張が企図される中、東北帝国大学にも文系学部を新設するということが議論されていくようになります。当時の教育制度では、旧制高等学校と帝国大学とは進学ルートにおいて一体的に考えられており、旧制高等学校卒業者には、帝国大学への進学がほぼ約束されていました。高等教育拡張計画では、旧制高等学校の大量新設も予定されていた反面、当時帝国大学の文系学部は、東京・京都だけに存在していたことから、他の帝国大学についても文系学部の増設が必要とされていたのです。

このとき、法学部や文学部と独立した学部を複数設けず、法文学部として東北帝国大学に設置されたのには、予算上の観点からだけでなく、大正時代の教養主義の影響があったといわれています。法学部が法学だけ、文学部が人文学だけの教育研究ではなく、幅広い教養を有する分野横断的な学びを求めたことが法文学部に帰結したということです。その後第二次世界大戦を経て、1949 年の新制東北大学発足に際し、法文学部は文学部、法学部、経済学部の 3 学部として改組され、教育学部が新設されることになります。

法文学部が設置されてからちょうど 50 年を迎えた頃、文系 4 学部は誕生の地であった片平キャンパスからの移転が計画されており、1973 年までに文系 4 学部は現在の川内南キャンパスに移転することになります。また、1998 年～ 2000 年にかけては大学院重点化がおこなわれ、学部を基礎とした教育研究組織から大学院を中心とした組織への移行が進展しました。2004 年の国立大学法人化や、2011 年の東日本大震災からの復興、2020 年以降のコロナ対応など、大学を取り巻く様々な内外の環境の変化の中で改めて文系・理系の総合知が問われている現在、本企画展示が、これからの大学を展望する機会になれば幸いです。

東北大学大学院文学研究科、東北大学史料館

法文学部発足　Establishment of the Faculty of Law and Letters

1922（大正11）に法文学部が設置され、東北帝国大学は文科系・理科系を完備した総合大学としての基礎を固めました。法文学部には阿部次郎や小宮豊隆といった時代を代表する知識人たちが赴任し、多くの学生たちに多大な感化を与えました。またこれにあわせキャンパスの整備が進められ、片平キャンパスにはコンクリート造りの近代的な校舎が次々と建てられていきました。狩野文庫を中心とする文科系の膨大な研究図書を納めるため建てられた図書館は、現在は大学の歴史資料を伝える史料館として使われています。

The establishment of the Faculty of Law and Letters in 1922 consolidated the Tohoku Imperial University as a comprehensive university with complete coverage of the humanities and sciences. The Faculty of Law and Letters was staffed by such representative intellectuals of the era as Jiro Abe and Toyotaka Komiya, who had a large influence on numerous students. In addition, development of the campus continued, and modern, concrete school buildings were built rapidly on the Katahira campus. The library building, built to hold an enormous humanities research library comprised primarily of the Kano Collection, is currently used as Tohoku University Archives.

片平キャンパス空撮
1928年（昭和3）頃
北側から南側にむかって。中央手前に理学部、その後方に法文学部や図書館の建物がならぶ。

法文学部2号館
19274年（昭和2年）竣工
現在は会計大学院として活用されている。

東北帝国大学正門
法文学部の新設に伴い、理学部と法文学部の間を東西に走る中央道路がつくられ、これにあわせて新しい正門が1925年（大正14）に開かれた。

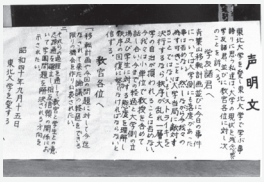
法文学部の教授たち
前列左から栗生武夫・土井晚翠・小宮豊隆・山田孝雄・村岡典嗣・阿部次郎。
後列には児島喜久雄ら。

東北帝大法文時報
法文学部の学友会「強立会」が発行した学生新聞。東北帝大全体の学生新聞として企画・発刊されたが、1932年（昭和7）の強立会の解散に伴い廃刊となった。現在そのほとんどが散逸し一部しか残っていない。

法文学部から文系４学部へ（片平キャンパス）Transitioning from the Faculty of Law and Letters to the 4 Humanities Faculties (Katahira Campus)

法文学部が創設10周年を迎えると、1933年（昭和8）に教育方針とカリキュラムの大幅な改正が決定し、翌年4月からこれを実施しました。法文学部の学生は、「法科」、「文科」、「経済科」のいずれかを選択し、より専門的な教育が施されることになりました。しかし、戦火が激しさを増して、学問研究に対する抑圧が強まり、国策への協力も当たり前のこととされるようになると、学業半ばで徴兵され戦地に赴く学生が数多く現れました。戦争が終わると、法文学部は再編が進み、1949年（昭和24）、現在の文系４学部が設置され、新制東北大学として整備されていきます。そして、駐留軍キャンプ跡地であった川内・青葉山地区が移管されると、全学的移転計画が進められていきます。

As the Faculty of Law and Letters reached its 10th anniversary in 1933, a major revision of its educational policy and curriculum was decided upon. This revision was implemented in April of the following year. Under the new system, students studying in the Faculty of Law and Letters were required to enter one department from among the Law, Letters and Economics departments, and thereby received a more specialized education than had previously been the case. As the war intensified, however, checks on free academic research grew harsher and cooperation with national policies came to be taken as a given. Many students in the middle of their studies were drafted into the military and sent to the front. After the war, the Faculty of Law and Letters was reorganized. The current four humanities faculties were established under the new Tohoku University system in 1949. A university wide relocation plan was implemented when the Kawauchi and Aobayama areas, formerly the sites of army camps, were transferred to the university.



大学の現状に抗議する声明文
文系４学部・理学部・工学部と５つの研究所のある片平構内が狭隘化していく中、移転整備計画が進められた。しかし、意見対立は激しく、教育学部の教員養成課程を宮城教育大学として分離させることでも見解が分かれ、学生の連署者が現れる事態となる。石津照璽総長と矢島羊吉文学部長は、その責任を取って辞任した。

法文学部勤労動員学生
1945年（昭和20）6月、陸軍造兵廠仙台製造所の選所にあたって、法文学部３年生を撮影した写真。この時期に入学した学生は、勤労動員や軍事教練により、教室で講義を受けることがほとんどなかったという。

法学部新制第１回生
1949年（昭和24）4月、第９代総長に哲学者の高橋里美が就任。法文学部は、法・文・経済学部の３学部に発展的な解消を選げた。５月には教育学部も設置され、ここに文系４学部が誕生。７月に新制東北大学第１回入学式が実施された。

新制東北大学の進むべき方向性
1957年（昭和32）に行われた創立50周年記念式典の式辞の中で、高橋里美総長は、これまでの東北大学の発展を支えてきた精神を「研究第一主義」という言葉で総括し、引き続きあるべき大学の理念を再定義した。

文学部日本文化研究施設分室
法文学部時代から文系研究所設置の構想はあったが実現しなかった。財団法人阿部日本文化研究所寄贈の申し込みをきっかけに、1962年（昭和37）4月、文学部附属日本文化研究施設が設置された。

伝統から未来へ（川内キャンパス）From Tradition to the Future (Kawauchi Campus)

1973年（昭和48）までに文系学部は川内キャンパスに移転し、同時期に図書館も新築され、新たなキャンパスでの活動を始めました。1960～80年代は、教養教育と専門教育の関係づけをめぐる葛藤が表面化し、学生運動により既存の大学のあり方が問われた時期でした。1984年の広域科学部構想、1993年の教養部廃止、その後の大学院重点化などの荒波の中で、文系の教員が良識を掲げて行動した結果は、現在の大学組織の中にも痕跡を残しています。学際的研究や文理融合、さらには国際的な研究の必要性が叫ばれる中で、東北大学の文系学部が担う役割は、以前にも増して大きくなっています。

By 1973, the humanities faculties had moved to the Kawauchi Campus. A new library building also opened its doors at this time on the new campus. The 1960s and 1980s were a time when heated debate over the relationship between liberal arts education and professional education came to the fore, and the status quo of the university institutions was challenged by a thriving student movement. The good judgement practiced by the humanities teaching staff during the challenging times of the 1984 "Broad Based Science Faculty" initiative, the abolition of the College of Arts and Sciences in 1993 and the subsequent increased emphasis on the graduate school has left its mark on the current organization of the university. Today, amid calls for interdisciplinary research, fusion of humanities and sciences, and also for international research, the role and responsibilities of Tohoku University's humanities faculties continue to grow.

中善並木（1961年～）
法文学部の発足当時、もっとも若手の教員であった中川善之助教授が退官を迎える際に、大学祭での学生との交流に由来する桜並木が誕生した。記念碑には「若き日の友情と感激のために」と刻まれている。

「メガ・マルクス」の編纂に貢献
東北大学が所有するマルクス手沢本などの貴重な資料は法文学部以来のマルクス主義思想・理論研究の伝統の賜物でもある。国際的な取り組みとしての新MEGA（新『マルクス／エンゲルス全集』）の編集でも東北大学出身の研究者たちは大きな役割を果たしている。

新MEGA I/12（エンゲルス「資本論」第２部編集原稿（1884・1885）、収録）
原草稿（右下）と新MEGAのテキスト（左上）
異文（削除、挿入、置換箇所）一覧（左上）。

東北大学教員が編集した
旧MEGA III/2,3、IV/14.（左下）
III/2,3 の編集主幹は、大村泉名誉教授。
IV/14 の編集主幹は、守健二教授

震災子ども支援室の活動
（2011年～2021年）
2011年（平成23）東日本大震災の被災者の中には、親を亡くした子ども、子どもを亡くした親も多く含まれていた。教育学部の中に設けられた震災子ども支援室は10年間、彼らを支える多面的な活動に携わり、"S- チル" の愛称で知られた。

2012年９月シンポジウム

三太郎の小径（1987年～）
阿部次郎生誕100年を記念し、仙台市の協力を得て整備された遊歩道は、ハイデルベルクや京都の「哲学の道」を念頭に、彼の代表作『三太郎の日記』にちなんで「三太郎の小径」と名付けられた。1990年（平成２）には親友で同郷の歌人、斎藤茂吉の歌碑も立てられた。

シンポジウム
「日本文化の底を流れるもの」
2002年（平成14）10月に行われた文学部80周年記念行事において、文学部附属日本文化研究施設などで学術交流を積み重ねたドナルド・キーン・源了圓の両氏を迎え、シンポジウムなどが行われた。

日本学国際共同大学院（2019年～）
2019年（平成31）、人文社会科学系部局により「日本学国際共同大学院」が設置された。海外教育研究機関と共同した大学院教育、「日本学」の構築が目指されている。2022年（令和４）には創立115周年・総合大学100周年を記念して、国際ネットワーク「支倉リーグ」参加大学による「支倉サミット」が開催された。

新たな日本学
の創生
Tohoku
Leipzig
Cambridge
Chadwick Council
ケンブリッジ大学
ライプツィヒ大学
ケンブリッジ大学
ケンブリッジ大学
ケンブリッジ